

『太平經鈔』卷四・丁部（七葉表六行目、八葉表三行目）

擔當…山田 明廣

その一

【原文】

惟天地之明、爲在南方、巳午同家、離爲正目、當明堂之事。日照明、以南向北、陽氣進退、亦不失常、陰陽相薄、以至子鄉、寒温相直、照徹自然、甚可喜。

生養之道、少陽太陽、木火相榮、各得其願、是復何爭。表裏相承、無有失名、上及皇耀、下至無聲、寂靜自然、萬物華榮、了然可知、不施自成、天之所仰、當受其名。

【書き下し】

惟だ天地の明のみ南方に在るを爲し、巳午は家を同じくし、離は正目と爲りて、明堂の事に當たる。日照明し、南を以て北へ向かへば、陽氣は進退するも、亦た常を失はず、陰陽相ひ薄りて、以て子郷に至り、寒温相ひ直くして、自然を照徹するは、甚だ喜ぶべし。

生養の道は、少陽太陽にして、木火相ひ榮へしめ、各おの其の願を得れば、是れ復た何をか争はん。表裏相ひ承くれれば、名を失ふこと有る無く、上は皇耀に及び、下は聲無きに至るまで、寂靜として自ら然りて、萬物の華榮するは、了然として知るべし。施さずして自ら成るは、天の仰ぐ所にして、當に其の名を受くべし。

【現代語訳】

ただ天地の光明だけが南方に位置し、巳と午はその属するところを同じにし、離は南方の中心となつて、天の明堂関連のことを担当する。太陽が照り輝き、南から北へと向かうと、陽氣は盛んになったり衰えたりするが、規則的な動きを失うことはなく、陰陽が互いに接近して（冬の）子の位置に至り、寒と温とが互いに均等となるなど、（太陽が）あまねく自然を照らすのは、極めて喜ぶべきことである。

万物を生み育てる道は、少陽と太陽とにあり、木と火とがともに万物を盛んにさせ、万物はそれぞれその願うところを得たならば、またどんな争うところがあるであろうか。万物が外側と内側ともに陽氣を受けているので、その名を失うといったことはなく、上は天帝から下は声なき者（水、土、山、石など）に至るまでひっそりとして静かで自然とそれようであるから、万物が繁榮しているということは、はっきりと知ることができる。（天が？）施しを与えなくとも自ら繁榮を実現できるのは、天が尊敬するようなことであり、きつとその名声を享受できるにちがいないである。

【註】

○巳午同家

『論衡』物勢…

曰、寅、木也、其禽虎也。戌、土也、其禽犬也。丑、未、亦土也、丑禽牛、未禽羊也。木勝土、故犬與牛羊爲虎所服也。亥、水也、其禽豕也。巳、火也、其禽虵也。子亦水也、其禽鼠也。午亦火也、其禽馬也。水勝火、故豕食虵。火爲水所害、故馬食鼠屎而腹脹。

○離爲正目

『漢書』卷二十七·五行志…

於易，震在東方，為春為木也。兌在西方，為秋為金也。離在南方，為夏為火也。坎在北方，為冬為水也。春與秋，日夜分，寒暑平，是以金木之氣易以相變，故貌傷則致秋陰常雨，言傷則致春陽常旱也。

○明堂

『太平經鈔』甲部卷一…

黑文者死，青錄者生。生死名簿，在天明堂。

『太平經鈔』戊部卷五…

作明堂於太陽丙午之地，為其開八窗四達，樂通八方四時之氣，欲與八風四時之氣合其吉，以自安也。明闢四門，樂得天下奇文殊策，希見之物賢明異術，可以長安天下而消災異。

『禮記』明堂位…

明堂位第十四（經）

講學大夫淳于登說云，明堂在國之陽，三里之外，七里之內，丙巳之地，就陽位。上圓下方，八窗四闢。布政之宮，故稱明堂。明堂，盛貌。周公祀文王於明堂，以配上帝五精之神。太微之庭，中有五帝坐位。（孔疏）

『晉書』卷十一·天文志上·二十八舍…

東方……房四星，為明堂，天子布政之宮也，亦四輔也。……心三星，天王正位也。中星曰明堂，天子位，為大辰，主天下之賞罰。

○陽氣進退、亦不失常

『太平經鈔』丙部卷三…

六月刑居六二，在未，居土之中，未出達也。時刑在明堂，時刑炁在內，德炁在外，擾擾之屬，莫不樂露其身，歸盛德也。七月刑在六三，申之時，刑在庭，萬物未敢入，固固樂居外。八月刑在六四，酉時，尚未及天界，時德在門，萬物俱樂闕於門，樂入隨德而還反也。九月刑在六五，在戌上及中，時刑在道巷，萬物莫不且死，因隨德入藏，故內日興，外者空亡。十月刑在上六，亥時，刑及六遠八境四野，萬物擾擾之屬，莫不入藏逃，隨德行到于明堂，蛟行之類，自懷居內，野外空無士眾。

○子鄉

『太上三洞神呪』卷九·雷霆祈禱諸呪·景霄罡炁呪…

坐鎮天罡，隨罡四方。春居震位，夏占火方，秋臨兌位，冬位子鄉。祖炁四生，輔炁隨罡斗隨時轉炁旋魁罡，正取為陰，背取為陽甲。

『太平經鈔』乙部卷二…

子乃天地之北極也，午為天地之南極也。子今冬不善順藏，午反承負而亡也。

○生養

『管子』形勢解…

地生養萬物、地之則也。

○少陽太陽、木火相榮

『春秋繁露』陰陽終始…

天之道、終而復始。故北方者、天之所終始也、陰陽之所合別也。冬至之後、陰俛而西入、陽仰而東出、出入之處常相反也。多少調和之適、常相順也。有多而無溢、有少而無絕。春夏陽多而陰少、秋冬陽少而陰多、多少無常、未嘗不分而相散也。以出入相損益、以多少相溉濟也。天所起一、動而再倍、常乘反衛再登之勢、以就同類、與之相報、故其氣相俠、而以變化相輸也。春秋之中、陰陽之氣俱相並也。中春以生、中秋以殺。由此見之、天之所起其氣積、天之所廢其氣隨。故至春少陽東出就木、與之俱生、至夏太陽南出就火、與之俱暖。此非各就其類而與之相起與。少陽就木、太陽就火、火木相稱、各就其正。

○失名

『太平經』卷百十四…

天下之事、孝為上第一、人所不及。積功累行、前後相承、無有所失名。復生之人、得承父母之恩、復見孝順之文。天定其錄籍、使在不死之中、是孝之家也。亦復得增度、上天行天上之事、復書忠孝諸所敬、為天領職、榮寵日見。

○皇耀

『元史』卷七十二・祭祀志一・郊祀上…

英宗至治二年九月、有旨議南郊祀事。…：一曰神位。周禮大宗伯、「以禋祀祀昊天上帝」。註謂…「昊天上帝、冬至圜丘所祀天皇帝也。」又曰「蒼璧禮天」。注云…「此禮天以冬至、謂天皇帝也。在北極、謂之北辰。」又云…「北辰天皇耀魄寶也、又名昊天上帝、又名太一帝君、以其尊大、故有數名。」今按晉書天文志中宮「鈞陳口中一星曰天皇帝、其神耀魄寶」。周禮所祀天神、正言昊天上帝。

その二

【原文】

機衡所指、生死有期。司命奉籍簿數通、書不相應、召所求神、簿問相實、乃上天君。天君有主領所白之神、不離左右。其内外見敬、亦不敢私承。所上所下、各不失時、太陰司官、不敢懈止。

正營門閣、恐自言事、輒相承為善、為要道、牒其姓名。得教則行、不失銖分。上古之時、有智慮、無所不照、無所不見、受神明之道、昭然可知。亦自有法度、不失其常。

從太初已來、歷有長短、甚深要妙。從古至今、出歷之要、在所止所成。輒以心思候算、下所成所作、無不就並數、相應繩墨。計歲積、日月大分為計。

【書き下し】

機衡の指す所は、生死に期有るなり。司命は籍簿數通を奉じ、書相ひ應じざれば、求むる所の神を召し、簿もて相實を問ひ、乃ち天君に上る。天君白する所を主領するの神有りて、左右を離れず。其れ内外に敬せられ、亦た敢へて私承せず。上る所下す所、各おの時を失せざれば、太陰司官は敢へて懈止せず。

正營たる門閣は、自ら事を言ふを恐れしむるも、輒ち相ひ善を爲し、要道を爲すを承くれば、

其の姓名を牒し、教を得れば則ち行ふこと銖分を失はず。上古の時、智慮有れば、照らさざる所無く、見えざる所無く、神明の道を受くること、昭然として知るべし。亦た自ら法度有れば、其の常を失はず。

太初より已來、歴に長短有りて、甚だ深く要妙たり。古より今に至るまで、歴を出だすの要は、止る所成る所に在り。輒ち心思を以て候算し、成る所作す所を下せば、就きて數を並べざるは無く、相ひ應ずること繩墨のごとし。歳積を計するに、日月は大いに分けて計を爲す。

【現代語訳】

北斗星が指し示しているのは、人の生死には期限があるということである。司命は生死に関わる文書や名簿を何通も管理しており、文書の内容が互に対応し合っていないければ、必要とする神を召請し、名簿について真相真実を問い、そこで天君に上奏する。天君には上奏されてきたことを受け取る神がいて、天君の左右を離れない。その神は内外において尊敬されており、また決して個人的に報告を受けることがない。上奏する場合も命令を下す場合もそれぞれ遅れることはないため、太陰司官は決して怠けたり中断したりしない。

恐れ多い門閤は自ら事を述べるのを恐れさせるが、善を行い、要道を行ったという報告を受けたならば、その姓名を通知し、教令を受けたならば寸分も違わず実行する。上古においては、智慧や思慮があれば、理解したり、悟ったりしないことが無く、そのまま神の道を受けることになるといふことは、はっきりと知ることができる。また自ら規範を持つていれば、常を失うことはない。

天地開闢以來、曆法には長短の規定があり、非常に精緻で奥深い。昔から今に至るまで、曆法を公布することの要は、到達するところと成立するところにある。そこで、思考を用いて推測的に計算し、年間に行うべきことに関する命令を下せば、かなりの数になり、墨繩のように互いに対応し合う。年数を計算するには、日と月とははっきり区別して計算する。

【註】

○機衡

『後漢書』卷二十九・申屠剛鮑永鄧曄列傳…

西至長安，乃上書王莽曰…「臣聞天地重其人，惜其物，故運機衡，垂日月，含元包一，甄陶品類，顯表紀世，圖錄豫設。」(本文)

機衡，北斗也。(注)

○天君有主領所白之神、不離左右。

『太平經鈔』壬部卷九…

上皇神人之尊者，自名委氣之公，一名大神，常在天君左側，主為理明堂文之書，使可分別，曲領大職。當為君通神仙，錄未生之人，各有姓名，置年歲月及日時。

○正營

『漢書』卷九十九・王莽傳…

人民正營，無所錯手足。(本文)

正營，惶恐不安之意也。(顏師古注)